

行って、あなたも同じようにしなさい

小 原 克 博

奨励者紹介[こはら・かつひろ]

同志社大学神学部教授

同志社大学良心学研究センター長

[研究テーマ]キリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通過して行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通過して行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10章25—37節)

たとえは何を語ろうとしているか

本日の聖書箇所は、福音書にあるイエスのたとえ話の一つで、数あるたとえ話の中でも最もよく知られているものです。イエスは「たとえを用いずに語ることはなかった」(マルコによる福音書4章34節)と記されていますので、たとえ話という形式はイエスのメッセージを伝える上で重要な役割を果たしていることが分かります。しかし、たとえ話は時として長いものなので、せっかちな現代人は「要するにそれは何を意味しているのか」と問うかもしれません。今日の聖書箇所の「善いサマリア人」のたとえは、要するに何を言っているのでしょうか。「困っている人がいたら助けましょう」ということでしょうか。もしその一言で済むのであれば、私の話はこれで終わりとなります。しかし、今日お話ししたいのは、たとえはそのようなものではない、ということです。

「善いサマリア人」のたとえの前提にあるのは、律法の専門家がイエスに投げかけた「では、わたしの隣人とはだれですか」(ルカによる福音書10章29節)という問いです。その言葉の前に、「彼は自分を正

当化しようとして」とあるのも示唆的です。私たちは隣人を愛しなさい、と言われても、何か理由付けを求めがちです。

このたとえ話の登場人物をあげてみましょう。追いはぎ、追いはぎに襲われた人、祭司、レビ人、サマリア人。さて、皆さんはこれらの登場人物のうち、誰に一番近いでしょうか。普通は、傷ついた人を助けたサマリア人のようにになりたいと思うのではないのでしょうか。このたとえ話を理解する上で、当時、サマリア人とユダヤ人の間に深い対立関係があったことを知っておくことは大切です。少し大げさな言い方をすれば、「こんな奴には死んでも助けられたくない」とユダヤ人はサマリア人に対して思っていたかもしれません。救いは私たちの予想を裏切る形で生じることがあることを、このたとえは暗示しています。

今日はこのたとえ話の解釈的な細部に立ち入る時間はありません。その代わりに、このたとえ話を深く考えることになった、私の経験を一つお話ししたいと思います。

シリア難民の救援活動の場で

2014年、トルコとシリアの国境近くにあるキリスという町を訪れました。トルコのイスラーム慈善団体によるシリア難民の救援活動を視察することが目的でした。家を失った人々が仮住まいしている場所を数件訪ねました。小さな空間にたくさんの家族が住んでいました。またそこは、じめじめした薄暗い場所でした。給食サービスに立ち会い、少しお手伝いをしました。スープとパンが振る舞われていましたが、それは1日1回だけとのことでした。戦火を逃れつつも傷ついた人々を収容した病院を訪ねました。4階建てのその病院で見た光景を今も忘れることはできません。四肢の一部を失った人々、スナイパーに撃たれて全身麻痺になった人々。もはや自力では自分の体を動かすことができないほどの重傷者で各階の病床は埋め尽くされており、その光景の前で息が止まりそうでした。

こうした場をめぐる中で、私の頭の中では、なぜか「善いサマリア人」のたとえが、ぐるぐるとめぐるっていました。あのサマリア人のように、何かささやかでも手伝えることはないかと考えていましたが、何もできることはありません。多数の難民と、心を圧倒する不条理の前で、一体、この私に何ができるのだろうかという心を押しつぶすような感覚だけが強くなってきました。善いサマリア人どころか、私は、追いはぎに襲われた人の横を素通りしていった祭司やレビ人と何も変わらないことに気づかされました。いや、息も止まんばかりの状況にいる私は精神的に見れば、追いはぎに襲われ、息も絶え絶えの人のもうでもありません。

国境線を越えれば、周辺には追いはぎのような過激な勢力が現に存在しています。それは架空の話ではないのです。追いはぎに襲われて、文字通り半殺しにあったかのような人々が病院のベッドを埋め尽くしているのも現実であれば、祭司やレビ人のように傍観する国々、国際社会があるのも現実です。

「善いサマリア人」のたとえが私の感情の奥深くに押し入るのを感じながら、そして、自分が決して善いサマリア人ではあり得ないことを自覚しつつ、シリアから逃れてきた子どもたちのために作られた学校を訪ねました。そこにいる子どもたちのほとんどが戦乱の中で家族の誰かを失っていると聞きました。そこで、偶然、女の子たちの歌声を聞きました。故郷で歌っていた歌でしょう。その歌声が、なぜか私の混乱した心の中に染み渡り、そして、なぜか、その歌声に救われる思いがしました。何か希望を感じたのかもしれませんが。

「善いサマリア人」のたとえが私の世界に侵入し、混乱させ、私はあのたとえ話の中の誰にでもなり得ることを経験しました。たとえを通じて働く神の力は、「自分を正当化」しようとする私たちの安易な自己理解を砕き、再創造するのでしょう。

たとえの力

このたとえ話は、親切な行いをして、私たちの満足心を満たすためのものではありません。「よい行いをしましょう」という道徳主義的な例示ではないのです。たとえの特質、その力を理解するために、新約聖書学者クロッサンの説明を少し借りたいと思います。クロッサンは、神話とたとえ話を区別しなければならないと語ります (John Dominic Crossan, *The Dark Interval: Towards a Theology of Story*, Polebridge Press, 1988)。

神話の中では、悪人は受けるべき罰を受け、善人は報われます。また、この世にある表面上の不条理に対する説明がなされます。この世に悪が存在するのはなぜでしょうか。ギリシア神話では、パンドラという女性が秘密の箱を開けてしまい、諸々の悪や病が世界に解き放たれたと説明されています。地震は、なぜ起こるのでしょうか。神々が喧嘩をして大地が揺れているのだと説明する神話もあります。

科学の時代において私たちは神話的思考から自由になったのでしょうか。科学は自然界にある法則や秩序を発見し、それによって自然界の現象を説明します。説明によって世界の見方を安定させるという点では、神話と変わりありません。現代において、科学がかつての神話の役割を果たしているとも言えます。熊本での地震のように、大きな被害が出たと知れば私たちの心は痛みますが、活断層やプレートの説明を聞けば、なぜ特定の地域で大きな被害が起きたのかを納得します。

一言でいえば、神話や科学はこの世界を説明し、安定させる役割を果たしています。ところが、たとえ話は世界を不安定にします。日常的なものの見方を転倒させます。安定した日常の中に裂け目を作り出します。たとえ話は、誰もが分かる日常的な素材を用いながら、日常をひっくり返し、その奥にある何かに気づかせようとする力であると言えます。

キリスト教主義、良心教育

たとえ話がイエスの語りの中心にあるとすれば、それはキリスト教にとっても大切な意味をもつはずです。そして、「キリスト教主義」とは何かを考えるヒントを与えてくれるに違いありません。キリスト教主義はイエスの教えを希釈したものであってはならないでしょう。ただ、分かりやすい言葉で説明し、キリスト教を分かったつもりになってもらうのは、イエスのたとえ話より、むしろ神話的語りに近いと言えます。我々の世界観をひっくり返し、既存の秩序を脅かすようなイエスの語りをもつ強烈なインパクトを、いたずらに和らげる必要はありません。イエスのたとえの力により近いキリスト教主義とは、どのようなものなのか、考え続けたいと思います。

同じ問いは、「良心」「良心教育」に向けることもできます。「困っている人を助けましょう」といった道徳主義的な枠組みだけで良心を考えるのではなく、むしろ既存の価値を転倒させ、隠れた真理に目を開かせる、たとえの力を「良心」や「良心教育」に注入することはできないでしょうか。

人を鋳型にはめる教育を新島襄は求めませんでした。むしろ、世の中の支配的な価値からはみ出すような「倜儻不羈」な学生をも大切にしようというのが、彼の遺言の一つでした。新島は狭い意味での「学問の人」ではありませんでしたし、体系的な神学思想を残しはしませんでした。しかし、彼の生き様や教育観は、イエスのたとえ話を彷彿とさせるものがあります。新島は、イエスによって語られた「たとえ」を大胆に生きたと言ってもよいでしょう。

それゆえに、私たちが「良心」を考える際にも、それを道徳主義的な鋳型にはめようとするのではなく、むしろ、新島襄の大胆な冒険的人生を背景に「良心」のあり方を描く必要があります。そして、そのように描かれた良心は、イエスの言葉に呼応するダイナミズムを備えることになるでしょう。

土の器としての同志社

同志社大学は創立150周年を目指し、「同志社ブランド」を強化しようとしています。大学が厳しい競争を生き抜いていくためには必要な戦略であると思いますが、これもまた神話的な語りに属します。自らを分かりやすく説明し、安定させることを目的としているからです。イエスのたとえの視点から見れば、同志社を「ブランド」として見るより、聖書の言葉を借りて「土の器」として見る方が適しているように私は思います。

土の器はそれ自体、粗末なものです。目的を果たせなければ土塊に戻ってもよいのです。それくらい謙虚に構えた方が、かえって、いろいろなものが見えてくるように思います。同志社は土の器にすぎません。しかし、もし同志社によってしか満たされないものがあり、それによって満たされるのであれば、同志社は他の何ものにも代えがたい土の器となります。土塊が神の恵みの器に変えられるという、私たちの想像を超えた変化は、イエスのたとえの力と響き合うものです。

私たちもまた土の器にすぎません。皆さんは何によって、その器を満たしますか。新島は学生の一人に次のように書き送りました。「良心の全身に充満したる丈夫の起り来らん事を」。これが新島の答えでした。良心碑に刻まれているように、土の器を良心によって満たすのです。それによって世界の見方が変わり、今まで見えなかったものが見え、今まで感じることのなかった力が体の中からあふれ出てくることでしょう。「行って、あなたも同じようにしなさい」。

2016年4月26日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録